

〈4〉悪性卵巣胚細胞腫瘍の細胞株樹立および機能解析に基づく新規治療法の開発

柴田 清住

名古屋大学医学部附属病院産婦人科

悪性卵巣胚細胞性腫瘍は10代、20代といった、リプロダクティブエイジに好発する疾患である。胚細胞性腫瘍の中でも卵黄囊腫瘍は増殖が早く、発見時にはすでに腹腔内に浸潤がみられる場合もある。若年女性に発症するため、妊よう能温存手術と抗ガン剤治療が行われるが、再発もしばしば認める。卵黄囊腫瘍はこのように悪性度の高い腫瘍であるが、治療法に関しては発症頻度が低い為ランダムイズスタディーによる治療法は報告されておらず、経験に基づいた治療が実施されているのが現状である。本腫瘍は抗ガン剤感受性が高く一時的には奏功することが多いが、中には再発し抗ガン剤耐性となり不幸な転機をたどることがある。これまでは、卵黄囊腫瘍の細胞株が存在しなかったため、基礎的研究はまったく行われていないのが現状である。今回我々は世界に先がけてヒト卵黄囊腫瘍由来の細胞株（NOY1）の樹立に成功した。我々は、NOY1の機能解析を行った。卵黄囊腫瘍がAFPを産生し、再発時にもAFPは必ず上昇し、卵黄囊腫瘍の生存に関与していると考え、AFPの転写因子に着目した。その結果Nkx2.5が卵黄囊腫瘍の増殖に関与することが示された。また我々は、卵黄囊腫瘍細胞のシスプラチン耐性株の樹立を行い、親株と耐性株のマイクロアレイを行い、GSTA1が耐性株において強発現しており、耐性克服のターゲットになることが示唆された。

参考文献

1. Shibata K, et al. Establishment and characterization of ovarian yolk sac tumor cell line reveals possible involvement of Nkx2.5 in tumor development. Oncology (in press)